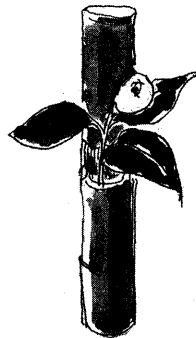


子供に支えられる大人

宮澤 康人



強い者が弱い者を支えるのはふつうのことだが、その逆に、弱い者が強い者を支えることはありうるだろうか。西洋の近代になって現れた子供観の中にはそれに当たるものがあるように思う。

かねてから私は、大人と子供の関係が歴史的にどう変化してきたかというテーマに関心をもっているが、日本と西洋の伝統的子供観は、しばしば「植物栽培モデル」と「家畜訓練モデル」と要約される。日本の子育ては、子供を作物のようにみなして、作物のまわりの雑草を除いてやるとか、日当たりを良くしてやるといふ風に、対象には直接働きかけないで環境を整えてやる方式であった。それと対照的に西洋のは、手におえない野性の動物を飼いならして従順な家畜にするように、子供にムチを加えて訓練する方式である。ム

子を惜しむと犬と子供はだめになる」という諺が西洋にはある。

それだから一六世紀に日本を訪れた一人の西洋人は、日本の子供が大切に可愛がられている様子を驚きの目をもって旅行記に記している。西洋では、一八世紀に至るまで、中流以上の階層の子供でさえ、今日の言葉でいえば児童虐待ともみられるほど苛酷なしつけを受けていた。「子供時代の歴史は、まるで悪夢のようであった」と、西洋の子供観の歴史を書いたドゥモースは言う（『親子関係の進化』海鳴社）。

そのような背景があるため、近代以降も西洋のしつけは厳しい。日本のように子供を甘やかさないといわれている。ところが一方では、それとは反対ともみえる心情が表れる。一八世紀のフランスの父親で、將軍でもあった一人の男は、妻にあてた手紙の中で、次のようなことを書いている。

「望んでいたような教育を子供たちにしてあげることができないという痛みが心の中をよぎって、しばらくの間とても辛い思いをしました。……私は自分の子供たちが同年齢の同じ身分のよその子供たちと同じ水準にあるのを見るためならば、もし他に何も持っていないとしたら、私の最後の上着の果てまで売るつもりです。」

ここには、孤立化する近代家族の中のが子意識とか、いとしい子供のために「献身したい」という親の心情と解されるものが表れている。これと似た子供への思い入れは、子供を描いた絵画、児童文学、その他いたるところにみられる。

このような子供観の出現はどのように説明できるだろうか。それについては諸説があり、先のドゥモースの本にもその紹介がある。もちろんいろいろな理由が考えられるが、少なくともそこには、子供という弱者を保護する立場に身を置くことで、親や大人が自身自身の存在理由を信じたという願望が働いていることは確かであろう。

近代社会に生きる親や大人は、大家族や村落共同体や教会などから解放されて、自由になった反面で、ひどく心細い存在にもなった。それなのに、自分よりも弱者である子供に頼られると、精一杯に強者の役割を演じなくてはならない。しかもそうすることで辛うじて強く生きられるということもある。心の支えとなるものを次々と失ってきた近代人には、何か献身できる対象がほしい。その渇きにも似た気持ちで選んだのが、弱い者がゆえに自分を頼りにしてくれる子供であった。

しかしこのような子供観には両義性がある。大人にとって子離れを難しくするだけではない。子供をいつまでも弱くて可愛いままにとどめておきたいとか、子供の必要に先廻りしてあれもこれも過剰に与えたいといった形をとって、子供を苦しめる原因にもなりかねない。

(放送大学)